

遠野物語における熊譚の環境教育的鑑賞の試み

高橋正弘

人間環境学科 環境政策コース

専門分野：環境教育論

キーワード：獣害、遠野物語、環境教育、熊譚

1. はじめに

自然共生の課題の中には、獣害という問題が含まれるが、その獣害には実にさまざまなタイプが存在する。例えばシカやサル・イノシシなどによる食害は日本全国で発生しており、特にこれらの野生生物が生息する森林と里山とが隣接するようなエリアではその被害は甚大である。そのような獣害の中に、熊による被害も見える。熊は獣害をなす存在であり、駆除の対象となる。しかしその一方で、熊は保護の対象ともなっている。つまり熊は、排除／保護といった両面を有する野生動物のひとつであり、その両面のそれぞれで人間とのかかわりがある存在である。したがって、熊を見つめなおし、今日の熊認識の在り方を整理する試みをする作業は、この両面を踏まえて人と環境との関わりを扱う必要があり、それが環境教育の役割のひとつとして重要となってくる。

環境教育として熊の本質を学習する、ということは、人と野生動物との付き合い方を考え直し、獣害概念の本質を正しく構築する契機にもつながる。そこで本稿では、この問題にアプローチするために、熊認識の手がかりをつかみ、問題点を環境教育がどのように扱うべきかという解題の作業に取り組むために、遠野物語の中に現れてくる話を鑑賞することとする。取り上げるのは、遠野物語第四三話の「熊対熊」の話である。この話を環境教育的に鑑賞することによって、熊譚の環境教育としての利用の可能性についての検討を試みることにする。なお本稿で「環境教育的」という言葉が意図するところについては、環境教育の教材としてどのように活かされていくかといった直接的な活用ということ想定しているのではなく、教材となり得る資料を取り上げ、それをを用いて環境についての一面を考える契機となり得る解釈を施す作業を環境教育的、と理解ものである。

2. 熊をめぐる認識の現状

熊本県下を中心にしつつも全国的さらには世界的なキャラクターにまで成長した「くまモン」は、今日では非常に有名である。もともとは 2011 年 3 月の九州新幹線全線開業をきっかけに登場することになった、とされている。このキャラクター自体は、胸部に白斑は見られないものの、おそらくツキノワグマをモチーフに作られたであろうと推察され、現在では熊本復興のシンボルとしての位置づけも加わっている。くまモンの着ぐるみの登場は集客力のあるイベントとなるらしく、今やくまモンは全国レベルで愛されている「ゆるキャラ」のひとつとなっている¹⁾。このくまモンに限らず、例えば童謡の「森の熊さん」の歌詞に出てくるような熊は、人間的な思いやりを持ち、人間とのコミュニケーションを楽しむことができる愛されるべき姿として描かれており、幼児にとってはまさしく親しみを持つことができる存在であることは明らかである。

一方で、熊は生命や財産に危害を加える危険な野生動物である。2016 年には 4 人が死亡、3 人が重傷を負った十和利山熊襲撃事件が発生しており、この年は特に東北地方を中心にツキノワグマによる被害の多さが目立っている²⁾。筈採りや山菜採りで入山した人がツキノワグマからの被害を受けている例が多い。北海道以南に生息するツキノワグマは、一般的には草食と考えられることが多いが、実際は雑食性の動物であり、よってツキノワグマの一部は人間を狙う被害が時折発生している。しかし日本国内に

生息する熊で特に人間にとって危険なのは、北海道地方に生息するヒグマである。ヒグマに関する特に際立った事件として記憶されているのは、1915 年に発生した三毛別熊害事件である。北海道の三毛別に入植した人々が、この年の冬にヒグマによって次々と襲われ、7 人が死亡、3 人が重傷を負うことになった事件であり、この時のヒグマの恐ろしさは、例えば木村（1994）や吉村（1977）などでも詳細にうかがい知ることができる。また 1970 年の福岡大学ワンダーフォーゲル同好会ヒグマ事件は、日高山脈を縦走中の大学生一行が一頭のヒグマに執拗に追跡され、学生 5 名のうち 3 名がヒグマに殺害された事件である（福岡大学ワンダーフォーゲル同好会 1970）。ヒグマの危険性に関する正しい知識を持たずにヒグマと接触し続けることによって発生した（遠藤 1972）事例として、有名な事件となっている。

これらのように、熊を巡る我々の認識は、熊を観念的には愛すべきキャラクターとして扱う、というものがある一方で、熊は接触した場合人命をも奪う危険な野生動物である、として扱われていている両方がみられる。このように「熊＝生命財産に危険を及ぼす生物／愛すべき可愛い動物」、という二項対立が、今日の一般的な認識に生じている。これはそのまま排除／保護という二項対立へと移行する認識の分裂である。したがってこのような状況を鑑みると、熊をめぐる認識の問題によって、さまざまな考え方の派生が存在するというは明らかであり、熊を巡っていわば錯綜している認識の状況が存在する、といえる。

3. 遠野物語における熊譚の鑑賞

遠野物語とは、遠野地方出身の佐々木喜善によって語られた遠野地方に伝わる伝承を、柳田国男が筆記し編集した上で、1910 年に発表したものである。119 話にわたるその内容は、天狗、河童、座敷童子、山人、マヨヒガ、神隠し、臨死体験、オシラ神など、伝説や噂話、殺人事件や妖怪譚といったさまざまなものを取り上げられている。

それらの話群の中で、柳田が題目として取り上げた動物に関する話、すなわち動物譚を数えてみれば、猿については 5 話、ニホンオオカミか場合によっては野犬を指すであろう狼（おいぬ）については 7 話、狐は 4 話、そして鳥については 4 話、である。ところで熊について取り上げられている話、つまり熊譚はわずか 1 話のみとなっている。つまり遠野物語の中での熊譚の出現数は、他の動物と比べてみてきわめて少ないということがわかる。遠野物語で扱われている熊は東北地方に生息するツキノワグマであると推察できるが、取り上げられている話が極めて少ない点から考えてみれば、野生の熊は当時の遠野地方においてそれほど人々の暮らしの中に入ってきていない動物であり、住民にとってほとんど身近な動物としては認識されていない、別世界の動物でもあると捉えられている、という指摘ができる。

ところで重要なのは、遠野物語の中では熊譚は実話であるとして紹介されていることである。野生動物である熊と、人間との闘いが実際にあったのだ、そしてそれは実際このような結果として終わったものであったのだ、という認識が、当時の遠野地方の人々の中に広く共有され語られていたことがとりわけ重要である。遠野物語の中で熊と人間が対峙する話はこれただ一つあって、そのことから人間と野生の熊との間にはこのような関係性が現実として存在していたということを、当時の遠野の人々が把握していたことについて、まず今日の私たちがそのことを理解しておくことが必要である。

そこでそのことを踏まえて、次に遠野物語の中では貴重なこの熊譚を取り上げて、その鑑賞を試みていくこととする。

一昨年の遠野新聞にも此記事を載せたり 上郷村の熊と云ふ男、友人と共に雪の日に六角牛に狩に行き谷深く入りしに、熊の足跡を見出でたれば、手分して其跡を覓め、自分は峰の方を行きしに、とある岩の陰より大なる熊此方を見る 矢頃あまりに近かりしかば、銃をすてて熊に抱へ付き雪の上を転びて谷へ下る 連の男之を救はんと思へども力及ばず やがて谷川に落入りて、人の熊下になり水に沈みたりしかば、その隙に獣の熊を打取りぬ 水にも溺れず、爪の傷は数ヶ所受けたれども命に障ることはなかりき（『遠野物語』第四十三話）

全体として遠野物語の他の話のように非常に短くまとまっていて、難しい語句や表現はあまりないため、わかりやすい展開でこの話はすすんでいく。概要はおおむね以下の通りである。

この話は一昨年に発行された遠野新聞にも記事として載っていて、雪の六角牛山の中で狩猟している上郷村の熊という名前の猟師とその友人が、野生動物である熊の足跡を見つけたので探していたところ、とある岩陰で大きな熊がこちらを見ているのを発見した。その熊とはあまりに距離が近すぎたため銃を撃つことができず、銃を捨ててその熊に抱きつき、雪の中を組み合いながら転がっていき、やがて谷の川の中に落ちてしまう。しかし人間のほうが熊の下になってしまい川の中に沈んだところを、友人が銃で上に乗っている野生動物の熊を撃ち取ることができたため、人間の熊は助かり、しかも傷は命に差し障るようなものではなかった³⁾。

4 43 話をめぐる解釈の検討

熊譚の概要を 3 で示したところで、4 ではその内容を委細に見ていきたい。とは言っても 43 話は非常に短い話であるため、以下の 4 点、つまり事件の場および猟師の出身地、猟が行われている季節、遠野新聞の記事、そして人物名について、解釈を検討していくこととする。

4.1 事件の場および猟師の出身地の検討

この事件は「六角牛」で発生しているが、六角牛山と呼ばれている山中でのことである。遠野物語において六角牛山は野生動物の宝庫として描かれている。例えば狼（42 話）、猿（44・46・47 話）、鹿（46・61 話）などが六角牛山に生息していることをうかがわせる記述が見られる。また山人（山男・山女）という存在も、この六角牛山で目撃されている（5・93 話）。第二話の神話では三人の女神の中の姉のひとりと与えられた、とされている六角牛山は、その神聖さについても遠野の人々に認識されている。つまり人々が暮らしている平地部から見れば、六角牛山は異界としての位置づけが与えられている場である、と理解することができる。

また 43 話には「上郷村」の猟師が主人公として登場しているが、遠野物語の第 7 話も上郷村の者が山中で猟をしている場面が描かれている。そして第 32 話に「何の隼人の猟師」という人物が出てくるが、これは「畑屋の縫」と呼ばれる上郷村の猟師の高

橋金助である、とされている（遠野常民大学編 1997）。つまり遠野地方において、上郷村は猟師を輩出する村である。なお、遠野物語の中で猟師を輩出しているのは、枅内（土淵村）、青笹村、上郷村、附馬牛村といった村々である。いずれも山地に近い地区であるが、これらの村はその地理的条件、もしくは生産条件や経済条件によって、村人が猟師となる、もしくはならざるを得ない、という推察が成り立つ。いずれの理由が正しいにせよ、上郷村在住の男性は、山中で猟を行う猟師としてこの遠野物語で描かれているということがわかる。

したがって平地とは全く異なる異界としての「六角牛」、そこは野生生物の豊富な場所であって、そこで何らかの理由によって猟師となった者が、熊という生命とまさしく命をかけて対峙する場面で発生した事件である、ということになる。そしてそれは平地で暮らす人々が全く観察することができない場でのことであって、伝聞で知る以外に承知することが決してできない話である、ということにもなる。

4.2 猟が行われている季節からの検討

43 話は、「…友人と共に雪の日に六角牛に狩に行き…」と、季節の設定が示されている。つまり雪の日の狩りの最中に事件が発生していることから、これが冬季であることがわかる。

雪の日に熊狩が行われるということについて、解釈の可能性の幅は広がっていくことになる。まずは、冬季に動物性たんぱく質源となるウサギなどの野生動物を追って山に入ったところ、偶然に熊に遭遇した、という解釈がひとつ成り立つ。これは上郷村の生産条件や経済条件と合致すれば、可能性の高い解釈である。しかしそれをいったん保留し、別の可能性についても検討してみたい。それは、熊は冬季には冬眠に入るため、この話では冬眠していない暴れ熊、もしくは冬眠に失敗してしまい餌が必要な凶暴な熊を相手にしているという可能性である。その可能性に従うと、43 話は単に冬季に狩猟が行われた時のエピソードであるということ以上に、ある場所、それが六角牛山中に危険な熊がいるという何らかの情報が誰かに得られて、その情報が上郷村に伝えられ、集落を恐怖に陥れつつ、その恐怖の解消のために上郷村の猟師たちによる熊狩が敢行されることになった、という解釈の可能性が浮かび上がってくる。そしてこの可能性に基づけば、自然と接している場所に立地するコミュニティの日常の安寧を、熊は脅かしている存在である、ということになる。つまり熊は十分に危険な野生動物であるという認識が、当時のこの地域の人々に十分に把持されていたことを把握することができるのである。

4.3 遠野新聞記事についての検討

冒頭の一文で、この話は「遠野新聞」にも掲載されているとわざわざ明記していることから、これは地元ではそもそも有名な話であるという示唆がなされていることになる。遠野物語はそもそも佐々木喜善の口述を柳田が採録したものであるため、この話が実際に起こった事件をどれだけ正確に反映しているかについて判断するには、1906 年に刊行された遠野新聞の記事を調べるという手法が考えられる。もちろん遠野新聞の記事自体が、実際の事件をどれだけ正確に反映しているかについては留意すべき点ではあるものの、それについては保留しつつ、43 話と遠野新聞との比較についての検討を試みることにする。

遠野新聞においてこの事件に該当する記事は、『注釈遠野物語』に掲載されている（遠野常民大学 1997）。それによれば、遠野新聞に掲載されている記事と 43 話の間には、若干の相違があることがわかる。両者の話で特に異なっている部分について整理すると、表 1 のとおりとなる。

表 1. 熊譚と新聞記事とで異なっている点の比較

	遠野物語第四十二話	遠野新聞第十三号（明治39年11月20日発行）
熊と戦った人物	上郷村の熊と云ふ男	畑屋の松次郎
熊と戦った場所	六角牛	上郷村仙人峠／沓掛山
熊（の頭数）	（一頭の）熊	子連れの大熊
熊を打ち取った場所	谷川（の中）	一二間離れし処（山中）
人物の怪我の程度	爪の傷は数ヶ所受けたれども命に障ることは なかりき	負傷は目も当てられぬ有様／今尚ほ治療中なり

表 1 をみると、遠野新聞での話と遠野物語での話では、人物名、場所、野生の熊の数やその熊を打ち取った場所、登場人物の怪我の程度についての違いが顕著である。

これについて、『注釈遠野物語』の解説には、「『遠野新聞』の記者は、伝聞の熊との格闘を面白く脚色して記述したのであろう」、そして「『遠野新聞』の誇張された記事が、さらに喜善によって脚色されて柳田に語られたといえるのではないか」という推察が述べられている。しかしながらこの推察が妥当であることの立証は困難であるし、この推察以外の可能性ももちろん考えることができる。それらは多岐にわたるであろうが、例えを挙げてみれば、佐々木の記憶が変化してしまっていたこと、この話が佐々木の耳に入るまでに人々の口伝てで話に変化してしまっていたこと、佐々木による創作が一部含まれていること、柳田による採録時に柳田による創作が一部含まれていること、などであろう。いずれにしても、創作に端を発する虚構性については留意しておくことが重要である。

4.4 人物名についての検討

次に第 43 話に出現する人物名について検討する。43 話で伝えられる人間と熊との素手による取っ組み合い、という壮大な格闘物語がおそらく虚構であったと判断できるひとつの理由に、人間の名前が「熊」とであるとされていることが挙げられる。熊対「熊」の物語、というストーリーは、偶然にしてはあまりに出来すぎている。もちろん人間の「熊」という呼び名がいわゆる通称であって、人々から実際に「熊」と呼ばれていたのかもしれない。しかし人間が素手で熊と組み合って、勝とうとすること自体、あまりにも無謀な挑戦である。それを行なった人間の名前が「熊」とあるということになっているところに、物語性が投射されてるとみることができる。

そこで考えられることは、人間の名前を「熊」としておくことで、人間の側にも野生の熊に比肩できる肉体的体力的な力が備わっているかのごとく、読み手に認識させることができるということである。そしてその試みについてはこの熊譚は実に成功しているといえる。熊対「熊」で、結果的に人間の側が勝利して終わるということについて、当然あり得るといふ誘導が効果として表れていると認められるからである。

柳田がこの効果について、遠野物語の執筆に際して意図していたか否かについては今日では全く判断材料が無い。ただし柳田が遠野物語に込めた文学性については、三

島由紀夫によって指摘されてもいる⁴⁾ とおりで、登場人物を「熊」とした箇所になくとも何らかの文学的な虚構性が備わっているであろう、という予測が成り立つ。そのことは、そもそも遠野新聞に登場してくる人物名が「熊」ではなく、あくまでも「畑屋の松次郎」という一般的な名称でありこと、つまりジャーナリスティックには取り上げられてしかるべき通称の「熊」ということについての言及が新聞上には一切ない、ということがその一つの根拠となろう。

5. 考察

遠野物語 43 話は、人間が熊に実際に対峙してしまった際に採るべき現実的な対応ではないが、それがあたかも現実にあったことのように記述されているということは、実は重要な問題である。野生動物としての熊に人間が素手で勝負を挑み、勝利をして生還することができたということは、遠野物語の示す虚構性だからである。そしてそのことは、今日の熊をめぐる私たちの認識がいわゆる虚構に囚われている、ということにも繋がっている。もちろん遠野物語は、伝説や幽霊譚など虚構に満ち溢れた世界観を魅力とした作品であって、そのこと自体を否定すべきではない。しかしここで改めて指摘しておきたいことは、遠野物語の中で語られている虚構性が、形を変えて今日でも継続的に発生している、現代の私たちもその虚構の中で熊を認識しているということである。

例えば、1976 年に制作された、極真空手を題材とした「地上最強のカラテ PART2」の一場面には、米国人の空手家ウィリー・ウィリアムスが熊と対決する映像が含まれている。まさしく遠野物語 43 話の熊対「熊」の現代における映像版である⁵⁾。しかしこの人間対熊の映像を今日改めて注意して観てみると、これは果たしてドキュメンタリー作品ではなく、完全なるフィクション作品である、ということが容易にわかる⁶⁾。つまり人間対熊という構造は、現代においても虚構の世界の中で語られる、もしくは作られる格闘なのである。ウィリー・ウィリアムス対熊の映像の事例を取り上げるまでもなく、くまモンのように熊を極端にデフォルメした愛すべきキャラクターが日常生活の中に氾濫している現在、虚構としての熊への親しみが醸成される機会は多くあっても、現実の熊の危険性についての認識を充実させるような契機には一切つながらないのである。

以上のことから、野生動物としての熊と人間との距離の在り方について、遠野物語 43 話に出現した虚構性の指摘を通じて、これをどのように環境教育の中で扱うかについて最後に考えてみたい。熊対人間という遠野物語の 43 話の鑑賞によって、人間は過去から現在に至るまで、熊と格闘する状況が時としてあったのだ、ということを理解する題材としてはいまなお有用であり、そのための教材として利用する可能性はもちろんある。しかし当然であるが、43 話をそのまま無批判に扱うのみでは、環境教育としての役割を果たすことはできない。教材としてこの話を用いながら、現代に横たわる熊の問題について考えるという環境教育を構築していくには、どうすべきであろうか。そのための課題として考えられることは、43 話を貫通している熊をめぐる認識の虚構性を把握してそれをまず超克すること、続いて野生の熊をめぐる正確な科学的自然認識および科学的社会的認識を形成するように、学習を形成していくこと、である。

環境教育を通じて、熊＝生命財産に危険を及ぼす生物／愛すべき可愛い動物、という二項対立を止揚することは、現代の環境教育においては必ず配慮していかなければ

ならない作業である。そしてそこから野生の熊と人間との共生という課題について取り上げ考えを深めていく、という手続きを具体的なものとして展開していくことが考えられる。獣害は、過去にもあった問題であり、しかし今日なおさらなる重要な自然をめぐる課題となっている。熊をテーマとした環境教育で、改めて獣害の課題に取り組むには、熊という野生動物に与えられているイメージについての虚構性を十分に指摘し、そこに含まれている自然認識の不正確さを抉り出していくことが特に重要なポイントになろう。熊は人間でも容易に相手にできる存在であるとか、人間と人間のようなコミュニケーションをすることができる愛すべきキャラクターである、といった誤った認識は虚構である、ということを繰り返し示し、そこからの脱出を果たしていくことが必要である。その虚構性からの脱出が果たせた折に、正確な熊認識へと達することが期待できるのである。

文献

遠藤公男（1972）ヒグマが人間を襲った例、哺乳動物学雑誌 5（5）、192-193
福岡大学ワンダーフォーゲル同好会（1970）北海道日高山脈夏季合宿遭難報告書
木村盛武（1994）慟哭の谷、共同文化社
遠野常民大学編（1997）注釈遠野物語、筑摩書房
吉村昭（1977）熊嵐、新潮社

付記

本研究の一部に、科学研究費補助金基盤研究(C)「固有の自然共生課題を有する自治体における関心誘起を企図した環境教育の在り方」（17K01046）を利用した。

補注

- 1) くまモンについて <http://kumamon-official.jp/profile> （2018.2.9 閲覧）
- 2) 読売新聞 2016 年 6 月 11 日朝刊「秋田クマ襲撃か 4 人目死者」
- 3) 1935 年に「遠野物語拾遺」を加えた増補版には、さらに複数の熊譚が描かれている。その中でも 43 話のように狩猟の現場において熊に遭遇した拾遺 210 話は、和田幸次郎という男が熊を銃で撃ったが、当たりどころが悪かったのか熊が立ち向かってきた。そこで死んだふりをしたら熊は男を投げ飛ばして悠々と帰ろうとした。そこで熊を追い打ちに打倒した、というものである。43 話と拾遺 210 話いずれの熊譚においても、人と熊との銃を媒介とした接触に際して、一時的に危険な状態には陥ったものの、人間は命を失うことはなく、熊のほうに命を失う結末となっている。
- 4) 読売新聞 1969 年 11 月 3 日朝刊「豊穰の海を書き続ける三島由紀夫氏」で、三島は遠野物語の 22 話の記述に「小説の感動」が認められることについて絶賛しつつ言及している。
- 5) ウィリー・ウィリアムス対熊の映像 <https://youtu.be/wCZGbUkabd4> （2018.2.12 閲覧）YouTube で見られる映像全体の長さは 3 分 24 秒であり、これは映画の中の熊対決の一場面のみを無造作に切り出したものであり、特段の編集などの加工は見あたらない。
- 6) 映像の内容については、おおむね以下の筋書きである。動画の冒頭に、夜の森の

中でトレーニングをするウィリーが出てくるが、すぐにシーンが変わり、海岸線で立ちながら瞑想しているウィリーが、次第に空手の型を開始し始め、その間何度か一瞬ずつ、熊の映像が挟まれる。そして場面が変わり、空手着の上を脱ぎその空手着を人に手渡すと、いきなり走り出す。その先にはウィリーより背の高い熊がすでに立ちあがっている。なんとなく温厚そうに見える熊である。その熊に駆け寄るウィリー。すかさず熊に蹴りやパンチを複数回入れる。しかし見た感じでは熊はほとんど動揺せず、反対にウィリーが転ばされたりしている。すぐにウィリーは体制を立て直すも場面は切り替わり、今度はウィリーが熊を押そうとしているものの、反対に熊に押し返されてしまうシーンが現れる。また場面が切り替わり、今度はウィリーと熊が組み合う。そしてまた熊に転ばされるウィリー。画面はなぜか大きく揺れ続けている。四つん這いになった熊をすかさずヘッドロックするウィリー。しかし熊は立ち上がり、反対にウィリーは再び転ばされる。画面が切り替わって、転んだ状態のウィリーが起き上がり、四つん這い状態の熊にヘッドロックをかける。そして熊のクビあたりに肘鉄を食らわすものの、熊の反撃を受けて再び転んでしまったウィリーになんと熊がのしかかっていく状態に。まさかのウィリー大ピンチ。手前にある草に映像が隠れてしまい、その状態はよく見えないものの、下にウィリーで上に熊という、相当危険な状況に見える。しかしまた場面が切り替わると、両者なぜか立ち上がった状態で再び組み合っている。揺れるカメラアングルなので分かりづらいが、熊の両手はウィリーの背中に思いっきり引っかかっているが、それによってウィリーの背中の肉がそげ落とされるというスプラッターな場面にはならない。ウィリーはどうやら熊の口のあたりを攻撃しているように見えるが、詳細は確認しづらい。するとまた場面が切り替わり、四つん這い状態の熊に対してウィリーが次第に距離を詰めていく。そして立ち上がった熊とまた組み合うウィリー。思いっきり首のあたりを熊にもたれているが、それでも全然平気なウィリー。熊はもはや戦意を完全に喪失しているようにも見える。細かく何度も場面が切り替わるようになり、熊を連続して攻撃していくウィリーが映しだされる。すると今度はなぜか仰向けに転がってしまった熊の上にウィリーが乗り、果敢に何度も熊に対して攻撃を繰り返していく。パンチもしくはチョップを数回熊に打ち込み、もう間もなく何とか熊を仕留められそうな状態にまでもっていったにも関わらず、また場面が切り替わり、なぜか熊との闘いの場面は終了しており、今度はランニングしながらパンチを前方に繰り出すトレーニング中のウィリーが映し出される。この時のウィリーは再び空手着の上を着用している。そしてそのままカメラに向かって走っていき、最後はストップモーションとなって映像が終了する。